

「遊就館」を近代史博物館に!

宮 脇 淳 子
(モンゴル史家・学術博士)

東京で暮らすようになって二十五年以上が過ぎた。毎年、桜の季節には必ず、夫の岡田英弘・東京外国語大学名誉教授とともに靖國神社にお参りに行く。夫は、陸軍大佐で工兵第十二大隊長だった母方の祖父が、日露戦争のとき奉天会戦で戦死しているの、その英霊にお参りするのだという。私の方は、父方の大伯父(陸軍中佐、支那事変中、江西省の南昌府武寧県で戦死)と父の従兄(海軍大尉、大東亜戦争末期に大分沖で戦死)、母の兄(大東亜戦争中、上海で戦病死)と義兄(フィリピンのルソン島で戦死)が祀られている。けれども、誠に申し訳ないことながら、今回、「靖國」にエッセイを求められて初

めて、遊就館に足を踏み入れた。夫も私も、歴史学者だからというべきか、歴史学者のくせに、というべきなのかもしれないが、歴史博物館の類は、仕事に直結する為、余程でないと思いきたくない。細かいところろが気になって楽しめないし、他人の仕事にけちをつけたくないからである。だから、神前で手を合わせたのち、境内の休憩所で甘酒をすすり、それから混雑の中を歩いて桜の花を眺めるのが、毎年の恒例となっていた。

ところが今回は、何でも知っている夫ではなく私がエッセイを依頼されたわけだから、仕事に誠実である為に、まずは見ないと始まらない。というわけで、代

替わりしたね、とうとうそういう時代になったんだ、と言いながら、二人で遊就館の展示をゆっくり拝見した。一階部分はほぼ予想通りだったけれども、二階の歴史展示に私は大いに感心した。幕末から明治維新までの日本国内の波乱に富んだ歴史については、吉田松陰や坂本龍馬を始めとして、かなりたくさん小説に書かれているし、映画にもテレビドラマにもなっているから、何となく知識はあるけれども、戊辰戦争や西南戦争については、今回初めて概要がわかった。近代に日本人が戦った戦争について、詳細な地図とともに、こんなに全体像がわかるように展示した博物館は、日本広しといえども他には存在しないだろう。

ことに、日清・日露戦争から満洲事変にいたる、日本と朝鮮半島・清朝・ロシアとの関係、さらに中華民国の成立やロシア革命にも触れた説明は、私自身も専門家の一人であり、平成十八年三月にPHP新書から『世界史のなかの満洲帝国』を出しているので、複雑な

歴史を図版化し、わかりやすくする努力と、展示内容の正確さに、作った人たちの苦心を実感した次第である。

私は今、非常勤講師として、東京外国語大学でモンゴル史、国士館大学ではアジア史を教えている。ことに国士館大学21世紀アジア学部は、学生のうち四分の一がアジア諸国からの留学生で、ほとんどが中国人、次に多いのが韓国人である。私が担当しているのはアジア学入門の歴史篇で、必修講義だから、日本人学生も留学生も必ず受講しなければならない。日本の近代史にほとんど知識のない日本人学生と、日本が悪いことばかりしたと教えられてきた中国人・韓国人学生に向けて、同じ話をしなければいけないのである。どんなに大変か、御想像戴けるだろうか。

日本の中学・高校の歴史教育では、古代から順番に授業をするから、授業時間がだんだん残り少なくなってくる頃に明治維新である。ずいぶん昔になるが、自身の記憶でも、日清・日露戦争に入る頃には試験期間

が近づいていて、あとは教科書を読んでおいてね、と先生がのたもつた覚えがある。

日本の歴史教育は、戦前は日本史と東洋史と西洋史に分かれていて、戦後は東洋史と西洋史が合体して世界史になった。私はよく言うのだが、これではどちらにしても、日本人にとって、日本列島の歴史と、海の外の歴史は、まったく別のものとして認識される。まるで、日本は世界の一員ではないみたいである。

だから私の個人的意見では、日本史と世界史の他に近現代史を別に立てて、学校教育では、こちらの方を必修科目にするべきだと思う。江戸時代中期までの日本史は、日本列島の中だけの歴史でもいい。しかし、一七八九年のアメリカ合衆国の成立とフランス革命のせいで、国民国家が誕生したあとは、地球上のあらゆる問題はすべて相互に関係してくるわけだから、日本史を含めた世界史を独立した教科の近代史として、学期の最初から、古代からの日本史と並行して教えるべき

に ぐ す や

である。
ところが、現代の生活に直結する近代史を学習できる場所は、日本中を見渡してみても、ほとんどないのが現状である。

今回、遊就館の二階に足を踏み入れて、近代史博物館がここにあったじゃないか、と感心した。いや、遊就館は歴史博物館というよりも軍事博物館だよ、とお思いかもしれないが、過去二百年の世界史つまり近代史は、軍事史に他ならない。国民国家という形態が、幻想もふくめて世界を席卷した理由は、国民国家が他国との戦争に強かったからである。

何年何月に、どこでどのような戦闘があり、何人死んだ、というのは、ふつうは史実である。現代中国のように過去の死者の数をどんどん増やしていくのは論外だ。世界中で起こった出来事を、地域を明らかにし、年月日の順番に並べた年表は、歴史を組み立てる時に無くてはならない資料である。日本人がなぜ大陸に出て行くことになったのか、なぜいくつもの戦争を戦っ

たのか、年表を眺めれば、事件の因果関係がわかるといふものだ。

ただし勿論、今の遊就館のままで学生たちも足を運びにくいので、今回せっかくの機会だから、遊就館を私の考える世界的水準の近代史博物館に生まれ変わらせるための提言を、いくつかさせて戴きたいと思う。私は戦後生まれの一介の歴史学者で、地位のない女だから、自由にもが言える。私の提案の中で、もしお役に立つことがあれば、ぜひ将来の構想に取り入れてもらいたい。

第一に、なぜ遊就館という名前なのか、今回初めて知ったのだが、中国の古典の『荀子』勸学篇「君子は居るに必ず郷を撰び、遊ぶに必ず士に就く」から「遊」と「就」を選んだそうで、「高潔な人物に交わり学ぶ」という意味から「英霊の御遺徳に触れ、学んでいいたきたい」からだである。「遊就」は日本語ではなく、日本の辞書にない。漢文あるいは中国語にもないからいともいえるが、字を見ても何の意味かわからない。

「遊就館」という名前は残してもいいけれども、「軍事史博物館」いっそ「近代史博物館」と副題をつけてはいいかがだろう。

第二に、靖國神社ほど有名な場所は、実は世界中でもそんなにない。日本の首相が交代するたび、また中国や韓国で何かあるたびに名前が挙がる。悪口でもマスコミに取り上げられたら、映画でも出版物でもヒットするのだから、普通はみんな喜ぶのである。ただで宣伝してもらったのと同じだからだ。そんなに大問題になってるのは、どんなところだろう、と、私が外国人に必ずついていってほしいほど想定していない。英語の説明がある、といっても、全部ではない、ところどころ思いついたようにあるだけなので、私の友人のイギリス人学者は、フラストレーションを起こして怒ってしまった。

彼がもつとも問題にしたのは、一階の「靖國の神々」の展示である。一人一人の

写真があり、手紙も並べられているのに、日本語がわからない外国人にはとりつく島がない。結局、日本人兵士の人間としての側面に触れることはかなわず、ただ軍歌の流れる中、延々と続く戦闘場面と、銃と剣の羅列だけが印象に残ったという。

今ある英語の解説では、日本人の魂についての見方や、死者を神として祀るという気持ちなど、靖國神社の本質を充分に表現していない。遊就館の基本的な主張、ベイシック・メッセージについて英語の説明がどこにもない、と彼は残念がっていた。

どうせ悪口しか言わない人たちにわかってもらわなくて結構、という拒否の姿勢に見えるのは、せっかくな来館してくれた客に対して損をしている。日本人の精神は日本人にしかわからないから、日本語の説明だけで十分、というのは傲慢ではないか。日本の若者にだって、丁寧な説明をしなければ理解してもらえないだろう。子供も日本語を勉強している外国人も来るのだ

から、展示ももう少し親切にするべきだ。

私気がついたのは、二階の入り口の大きな薄い布の垂れ幕に古代の親王たちが国を思う気持ちを詠んだ素晴らしい和歌が四つあったのに、いつの時代のものか記載がなかったことで、大変残念な気持ちでした。

明治時代からあった軍事博物館を継承した部分と、近代史の展示と、英霊を祀る部分とは、はっきり区別すべきである。天皇陛下や皇族の方々と靖國神社の関係は、神社にとつて重要だということはあるが、博物館に来る外国人にとつては、それも日本の近代史を学ぶ資料の一つだという認識が必要である。

つまり、何が展示してあるかをもっと宣伝し、遊就館を、世界に日本精神を発信する拠点にしてはどうか、と私は思うのだ。まず、すべての展示に正確な英訳をつけて、何が問題だ、と問うてみる。そして、論争が巻き起こることを願ってほしいことと考えるよう、発想を転換してみたいかがだろう。